特231
73

矢野滄浪著

支那論

③

0001557000

0001557-000

特２３１－７３

支那論

矢野滄浪・著

時事評論社

昭和１４

AAC

この著作物は、著作権者不明のため、著
第６７条の規定に基づき、平成１２年５
付けで文化庁長官の裁定を受け使用する

特231
73

支那論

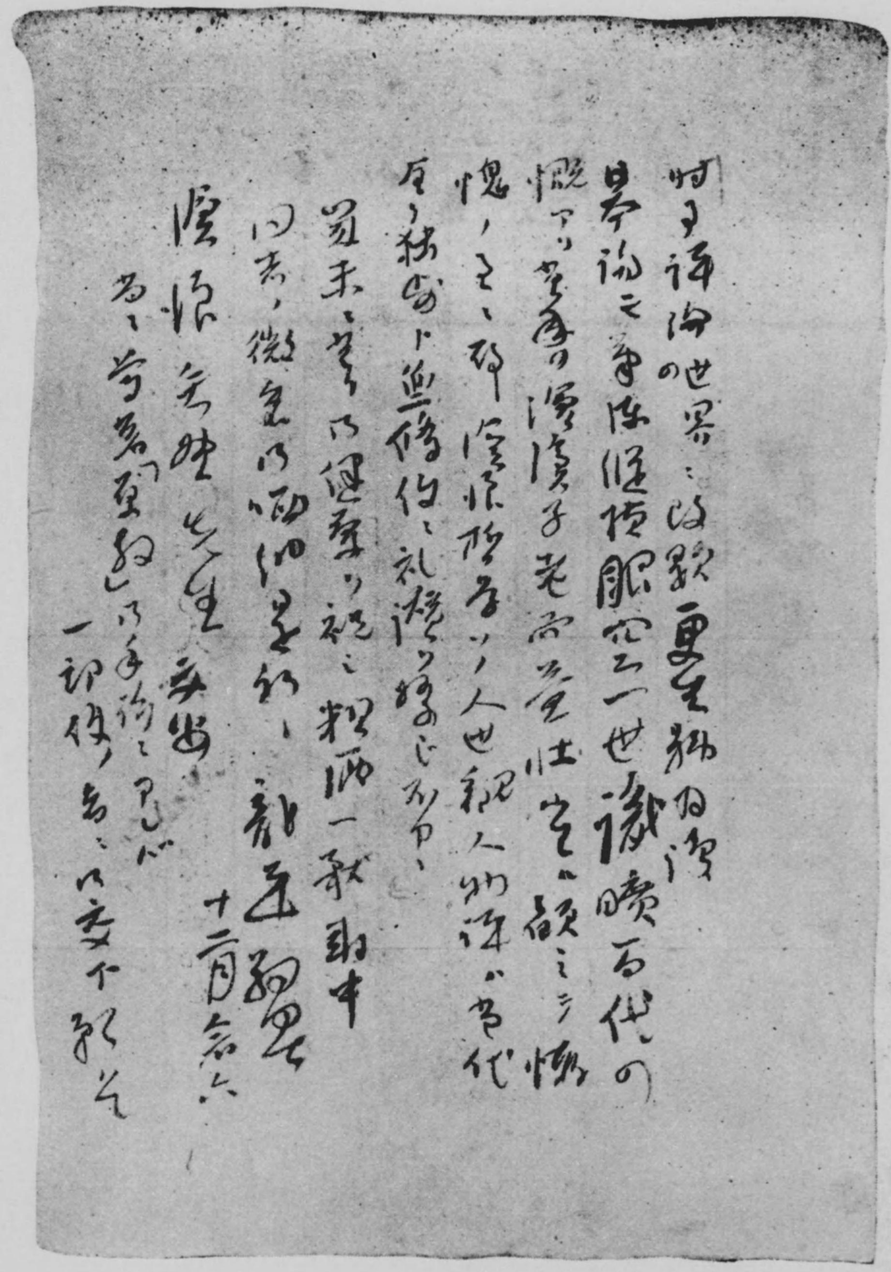
矢野滄浪著

特231
73

矢野滄浪著

支那論

昭和十四年 文求堂



白岩先生は岡山縣下の人、夙に上海同文書院を出で同元老として荒尾精先生に亞ぐ嘗つて日清汽船を創立し、同會社の船に珍田侯爵と同乘して楊子江を遡江、支那兵より發砲せらる、爾來谷、近衞氏等と協力支那教育に盡瘁、後又澁澤榮一鈴木馬也氏等と共に東亞公司を興して支那開拓に從事す。

自序

我等此に斯書を江南の梅が枝に結びつく
千載の下教を乞はんがため也

昭和十四年五月一日

著者識

支那論

矢野滄浪

1　世界は如何動く

こゝに、蘇東坡の有名なる赤壁の賦の一言を引く。

「逝者、如レ斯者未レ嘗往也、盈虛者如レ彼、而卒莫二消長一也」

全く、東坡のいはるゝが如く。この天地仍、いつまでも逝かぬものと消長なきものとがある。今、彼れはこれを水と月とにいへるが、大天の如き、大地の如き亦さうである。

自然科學に遵へば天も地も、いつか殆く、況んや各動植物の若き咸な進化して變つてしまうといふのであるけれども、さういふことは、宇宙創造上のことで惟り神が知り、人間の如き天地に、その生を享くる者からは云ふ權能がないといはなくてはなる

まい。

但、惟ふに、宇宙は永々永劫一存在體でも、元來は未だ此存在體の外、二つも三つもあるのではあるまいか、たゞ我等、此以上知られないことゝなつてゐる。

全く科學者は、全く種々のことを云へどこれには、既にキリスト教徒の如きは世界は神が創造したといふ上から反對し、佛教も亦、宇宙は無始無終の存在であるといふ上から反對してゐる、殊にダウキンはダウ其人が、土地の性と物の變化に愕いてしまつて、ああいふことをいひ出したのであらう。否又こゝに東坡のいふ永久逝かぬものの中にさへ、我等人間の如きにも、生死の中の生々死々は、つひに、逝かぬものにいはるゝ。

世界は斯くの如くして存在するが、又其中にて、こゝに亦我等が生死假定中、己に其生物上の

性

山河

本能

のこの三者は、世界中、永久或は此世の物の本體にて、不朽不滅にいはれようとする。

古來曰はずや、國亡びて山河有りと山河有りは國土の體をいつたものである。山河の次に、人に人の性、又民族に民族の本能は同じく永劫であるといはなくてはなるまい。故に、世界は如何動くかの中にて、我等に肝要な智識は、性、山河、本能は、永久動かぬものであるといふを知ることである。

性と本能の如何に不滅かは、夫の亡國の人民が、いつまでも民族の在る限り、民族の性を喪はざる又其本能を有しあるに、これがいはるゝのである。

但、本能は、つひに天と世に乖く、破壞であるから滅ぶ。これを知らなくてはならない

2 化成論

世界は

一元化

多元化

これは、中々むつかしく、祇、我等は物に諸性を看る。故に敢へて釋迦のいふ各生に、各性の有るを信じようとする。釋迦の言に曰く

「犬には犬性、猫には猫性、馬には馬性、牛には牛性有り」

宇宙は、無限大。一對數、數對一又一對數、惟り三千世界に留らず、何程。存在すべく感ぜらる。

祇神は創造の元に既に存在し。又歴史的に、神の子としてましまし、卽ち湧出てて存在ます。

而して今、大天が既に春に百花を下しある、宇宙化成の軌範を示したるかを想察せらるる。故にこれらに稽へて我等の政治は、力めて大きく廣く、いはゞ性と化成に本を置いて然るべきを知るべきであらう。こゝに、假りに東亞を一元に扱へば、便ちヨーロッパに、米地に亦元をいはるゝ。

故に、いはゆる、ボルセヴッキーは、これを元にいひ度くも人の性に忤くからして、

擧世これを撲滅すべく、次に英米の巧利及び自由は、同じく元なるも只生活國の政治に過ぎざるとして、これを排斥し、又次にナチス、ファッショは、同じく元ながら時の制からくる政治として、これを取るも。眞の政治の大本としては未だ完全のものに非らずとしよう。

政治は、到底

性

勢（時の力）

此二者に攻覈して、其宜しきに出づべきである。

最早、東亞の覇者たる日本は支那大陸に新秩序の建設に出づるも、元、世界は秩序を有し、新秩序は還た本に反へる、復た新たに化成をたづぬべく、卽ち日本は我皇の下、世界と關係し。又神々と關係ある。則ち新秩序の目的物支那は固より決して一私有物視すべきに非らず、故に姑らくは時の勢ひに多くを執るも、やがては世界各性の上に度りて、愼重の政治に出でざる可らざるは固より其所であらう。

故に、大陸の新政治には、斷じて性の如何を正視し、同時に文化の開發は差異差別、力の優劣の關係から推進力の發生するを知り、則ち茲に一元或は全體性の中、化成から自づと性の自我と其對立性を重んじ、勿論互讓と一致を大切とするも、いはゆる摩擦は推進力を促すを知りて、こゝに

分國（分轄）政治

性尊重政治

の如きを此に取入れて化成に出るを希はうとするのである。恰かも赫々、大陽が性を本に萬物を育成するやうにして行度いのである。

此比世間で一國一黨をいつてをるも、物は咸く相對で進歩卽ち推進力を生ずる、設令一元化の中にもこの生存方法は必然である。

今、英、米、佛等が、こゝに折角發言せんとするならば先づ、自分達からヘッゲルも、スペンサーも、トルストイも、墓から叩き起して一緒に鳩首しての上にて第一に巧利ヨーロッパを改めて、次に世界に發言すべきである。

祇、恂に日本の將來憂ふ可きは、鬼の邦、共產ロシヤの問題なるが、幸ひに、人には

性

特に、日本には

天皇

特異性

があるを識り。茲に生きる滅びるは、性で釋かり。特に特異性は、我皇道と一致性があるを釋るべきである。則ち鬼の共產は、日本には容るされざるを知るべきである。

3　英、佛、米、露の先祖

春二月、其處に赤い麥畑があるに、其一方に人の往來がある、良き市民は遲くなつても往來を往くのに、然るに、不良の漢は麥を踏み折つて近路を取る。往來を往くは善人、近路を取るは惡人、善人は人に稱せられ、惡人は指彈せらるゝ。

世界は大體二つから成つてゐる。

善。

惡。

の二者である。

善は成りて成り、惡は、亡びて亡ぶ。

但惡にても、何かの使命はある、それはかくすれば、亡滅する戒めを示してくれるからである。

南窓一樹の梅、花下黃鳥を囀ずるに、其下、肥臭い肥料がつかはれてある。花は善であるに肥料は、惡である。かういふ場合、惡は肥料に一つの使命であつた。世界の立てらるゝに、惡は亡びてあるから惡になるなといふ戒めは、それである。則ち惡は、善を光らすべく犧牲になつてゐる。

然れども、惡は止むなくしては、つひに、世界を亡ぼす、戒しめなくてならない。

人間の性は、世界の成立に其本である。されば、性は、人の本であると與に亦世界

の本である。乃ちこゝに成りて成るをいはるる。

神は、世界をつくつた。順つて其本體は生くることで、善でなくてはならない。萬物咸な雨露に育つ、卽ち惠みである。扶けである。惠み扶けは仁である。故に孟子は、世界を仁にいつてゐる。哀惜惻隱の心は、我本性から出てくる。而してかうした仁は、物を生かし卽ち人を生かす。成りて成るのである。成りて成るは善である。これを以て世界の宗教は皆善を本としてゐる。善は、世界の本性にいふ可きである。

然るに、不良卽ち不善は、ヨシ一時勢ひの利用から强化があつても、卒に亡ひである。亡びて亡ぶる。

然るに、世界往々勢ひに趨り、かくて亡びを招く、生るために生くるはこゝに生ず。戒しむべきである。ポルセヴツキーの初期、亞米利加に格言があつた。

「是非世界が、新らしい大勢であるからといつてボルセヴツキーになるのなら、私共は最後の一人になつてボルセヴキズムにならう、さうすれば世界は、かうして亡びたといふを知つて亡びるから。」

全くかういふことがいはれてをつた。

故に、其頃の國務卿ヒユースは、賢明の人だけに、いたくソヴエートロシヤを憎みて、幽痒かり「外道奴、鬼人奴ロシヤ」と罵つてゐたのだつた、故に北米合衆國は、久しきに亙つてソヴエート、ロシヤを承認しなかつた。然るに近時米國は商人邦の本性から、只儲かるに傾きて、這回の日支事件にも、ロシヤに武器賣込に夢中となつて宅る。米國の傳統たる建國方針からは、正に墮落國である。

其頃、日本にても、マルクスの資本主義が流行して、新聞雜誌皆これを唱へ、別して中央公論改造等は、其先驅者であつた。內務省脇の官僚亦雷同し、政治家、財界、亦、卒ね、皆さうであつた。

英、佛、露は、いづれも、惡性の邦であるが、露の破壞主義は、固よりボルセヴツキーの邦であるから、當然であるが、英佛の然るは、さうした思想上からではなく、これは一に、其の乃ち本性或は惡い血統からさうなのである。

佛は、佛國大革命の邦であるが、大革命は、世界に、人權を伸暢したことには大功

績があつたが、國家の質性如何からは只國家乃ち人權かは、少しく問題であつた。ルーソー、ミラボー等は、只個人性の神聖こそ說いてゐても、國家性又は政治性からは、妥當性を缺いてゐたといへやう。

試に思へ、佛國革命から出てゐる自由は、人間の自然性其まゝではないか、彼れには、社會、國家の二つの制限は何もないのである。荒削りで鉋のかゝらぬ自由である。ヘッゲルの唯物科學の弟子たるマルクスは、この自由を、このまゝマルキシズムの基礎としてをるのである。ロシヤに鬼の國が出來てゐるも、偶然でないことである。

元、佛の先祖は、大古久しくラキン河の石垣に巢を造つて、東洋からくる貨物を押領し、ロッバ、バロンの名を稱せられてゐた。既にさうした盜賊が其先祖である。大革命をやつて久しく人權主義の開山でも近世只個人巧利東亞に呑噬の强慾を張り今日日支事件に亦火事場稼ぎの盜賊は、亦かうした傳統性からであつた。

英國は、北海ノルマン海賊の子孫であつて、故に、其舳にかゝぐるヴッキングの鬼看板は、今日にても、英の本性を表現してゐるのである。

征服者ローマの亡滅後、キリスト教の力にて正義の邦と化し、亞いて、ルーテルの新教徒、此に興りて後卽ち十七八世紀には、ウエリントン、ヂスレリー、コブテン、ブライト、バーグの徒出でて、正義英國といはれてゐたが近頃は還た曩祖ノルマン海賊の本性に立戻つて、唯、我國の利害から打算し、正義も人道もなく却つて其本性を其まゝ陰險邪惡の邦となつてしまつてゐる。骨までもしやぶり、血までも吸ひ乾して了ふ。スペンサーのあくなき生存、鬼の出現は盲英國である。

英佛米の强慾とヘッゲルの只科學萬は世界から排斥すべきである。

然るに、蔣の支那は、ヤング、チャイナが、ヨーロッパの唯物教育に謬られて、只生くる爲に生るを主とし、玆に這度の如き大事件を惹起してゐるのであるが、然かも英佛米の巧利主義がこれに加盟してゐるので今日の如くなつてゐるのである。

英、佛、ロ等輙ちロシヤは勿論世界の破壞者。英佛亦其一類で、米亦其仲間である。是の如き外道惡魔の諸邦が、如何して、世界の本性に卽する建全文化を創造し得べきである。故に、日本の我皇道下のこの度の征戰こそは、宜しく

大天
大地

もこゝに震撼して、大日本のこの反本又再建新世界への壯途に總起立して、日本に協力すべきであるが、かういふことは、英、米、佛の外道國には、到底判りようがないのであらう。

4 鬼論

人は
智
情
意
を本體とし、
神はこれに、正々仁を加へて、

これを又其本體の一に加はへてゐる。

故に、神は只正義一遍では神にいはれないやうである。「知る」ことゝ「仁ある」こととを大切とする。

大楠公は、人としても、本體たるに申分なく又、神としても亦其本體を具へてゐた。

惟り乃木大將は「智」卽ち知るに足りなかつた。完全の神でなかつた。

世の中は、固よりの人の缺陷に喰ひ入るべく、世に幽靈が出てくる。鬼が出てくる。狐狸妖怪が出てくる、悲夫人の本體を缺く人、これに欺かれて一生を破損す。ソヴェート、ロシヤは鬼である。蔣等は幽靈化の賊である鬼の喰ひ入ること當然である。

世界は、原始以來、始終かうした魔物が出沒する。況んや、人生は無知と感情からつひに混亂ある所以である。蔣の今日も、孫文の三民主義と英、米、佛の巧利から悉皆

惡魔道

に陷つてゐる。人間性を喪つた迷亡である。

支那は、尤も迷亡の邦である。迷亡的犧牲は、何程もある。

故に、この世は又人と鬼の摑み合でもある。日本今日の國難も正にそれである。

性は、物の本體である。本體に順へば、我辿る道か明々我前に瞭かになつてくる、いはゆる正義である。

神は物に正義の權能として智を授けてゐる。

しかも神の惡戯は魔に亦魔の性に應じて夫れ相當の武器を授けてゐる。

故に、破邪顯正といふことがいはれてゐる。

然るに、物は、殊に人は意慾から、つねに我利に走る。つひに幽靈、狐狸に欺かゝ、我政治家に名士にさういふことが中々多い。ヤングチャイが世界第一の中華から抗日排日も亦、この一つであつた。

5 平和の二字

一九二一年十一月、米國華府に、第一軍縮會議の開催せられたる時、我等は、原ミニスターのセクレタリといふことにて、此會議に臨席することが出來て、其會議の中

に入つてゐた。

會議は、英のバルフォア、佛のヴキヴキアニ、米のハーヂング等が主たる出席者で、又支那からは顧維均、日本からは、加藤友三郎、德川家達が出席してゐた。

然るに、バルフォア等のいふことは、其結論に、必らず

「永久平和」

を云つてゐた。

我等、其際以爲らく、彼等の「永久平和」は、世界性にも、又其使命にも、一向頓着なくて、只然るので、これ粗末な世界觀であると愚視し。つひに嗤笑を禁じ得なかつたのであつた。則ち世界の政治家には科學はあつても、ヒロソヒの觀念はないから、此に出づと蔑視してゐた。

後、二三ヨーロッパ通に正せば、バルフォア等は、オクスフォードの碩學で科學からはすべてに通じてゐるが、ヒロソヒから出る政治思想には、固より常識だけであつて、君の云はるゝが如き非凡の見識は未だ彼等からは樹てられぬのであらうといふの

であつた。

其頃、既に我等は、世界は一切各性を本とし、政治からは、人間性を基に、此上性から當然其役にいふ可き使命を全うするが其使命であつて、次は時に起る世界の律卽ち運勢善用を主とすべきでこそあつて、いふ所の平和は、必然世界終局の目的であるまいと思つてゐた。

乍去、こゝに世界が、各性を全うし、同時神に循ふか、平和は存立する。

只無爲而化すからいふ平和は、休息であつて平和ではあるまい。寧ろ彼我に爭ひあつて、使命を樹てて行くを本願としやう。

世界は、到底、恒に、性を本として、この上に性から起る勢ひと他に天からの律に遵ひて制を樹てて爭ひをくりかへすこれが卽ち世界の本質であらう。

かくて、千劫萬劫、これをくりかへす、この他世界の動く方法はないのである。乃ちかうした爭ひは文化の向上でもあり、又自我の發揮でもあるのである。

然るに事、こゝに觸れず、只治國平天下、永久平和は、世界のかうした存在の終局

に冠すべき言葉がないので卽ち行詰つてこゝに出てゐたともいふべきであらう。或は性及び律に一段落を畫してさういつたともしよう。

ヨシ又、文化の向上といつた所で際限なく向上は無く、矢張り人力の有る限りを盡して然るべきにて、若し人力を圓とすれば圓の範圍を廻はるだけがそれにて恰かも地中海を航するは地中海沿岸を廻はるだけに留ると同じことである。則ち如何に向上も、人間外の向上はないからである。

たゞかうして行く。人は人に失望して希望がなくなるといはるゝも、人は、生々死々則ち永久に生きて行く、故に一つのゼネレーションは次のゼネレーションにつゞく、此に、若い人から若い人がつゞく而してこれら若い人には、先人の眞似が眞似でなく型は同じでも一々其世の自我で生くる、一々新らしい。ヨシ一々新らしくないことであつてもさうした型のくりかへしは其人達には必らず新らしい。故に世界何遍くりかへしても、人生は一々新らしいから飽くことないといはなくてはならない。

シーザーの描いたのA字もナポレオンの描いたのA字も、字の性は同じでも、描く

時の其人の氣分と性は違つてゐる。則ちナポレオンは、シーザーの再生ではない。

故に人間は、唯地中海を廻はるだけでも、向上への努力は、一々新らしく自我の發揮といふことがいはるる。則ち一々自我の發揮は、設令力に限られて、地中海を廻はるに留つても一々樂しく面白く、其性の上に努力して我使命を築き上ぐるが人生の任務で世界は、この集成の上に世界を存續させて行くといふべきである。惟、人力を盡して平和の世を現出するだけが、人生の目的でないのである。只無事平和が、人生の目的ならば無爲而化が人生の目的とならう、乍併無爲而化は古人が、未だ人生に闇らく、さうしてやつてゐたら人間界の何であるかゞ判らうとしたものであつた。故に人生の目的といふことは、今日の人達に課せられてゐる新らしい問題なのである。

性律

に知りて、人生の如何を見極めて後此に達すべきである。

6 秩序論

人曰く

「新秩序の建設」

乍去、世界草創の元に、既に

「秩序は出來てゐる」

無爲化の時代、いつの間にか秩序が出來てゐやう。況んや禹の如き大政治家が出てゐる。秩序は出來ていたといふ可きである。

孔子が千言萬語縷々として善言を綴つたことは、秩序の建設であつた。則ち論語は支那の聖書である。

論語は、惟り支那の聖書のみならず亦日本武士社會の聖書となつてゐる。世人が斯に云爲する新秩序は、支那のこれまでの秩序は秩序として、新らしく、大東亞の再造上の必要語として、此語の生れ出たものとしなくてはなるまい。

尤とも、支那には、聖人の建てた道があつた。道に順へば

禮

分

を守り、こゝに決して他を侵さず、只我分に終始してゐて此に其世の平和があつた。然るに、かくして分に終始すつひに修身齊家に終り、づひに積極進取の觀念が熄んでしまつた、支那に科學の興らなかつたは其爲めであつた。

之れに反して、ヨーロッパはまだこの間迄も氷山峨々の世界であつた。ダニューブの谿谷に、文化の興つたも近代の事にはるる。則ち國が若いだけ、たゞ人類が動物性其まゝで禽獸の國である、また支那に發達した。

禮

分

の如きさうした奥床しいものはないのである。然るに物質文化に醉はされたヤングチャイナ達が、こゝに老子を捨て、孔子を捨て孟子を捨てヨーロッパに趨つたは、全く

間違つたことであつた。

やがて、ヘッゲルの科學萬能に、改訂が行はれて、禮に分が存立し此上、唯心文化が發生せば、支那も世界も根本的に救はるゝことであらう。

7 地理性

地理學上

性

の研究は、尤とも必要のことである少しく性を研究するに、世界は、各地各性で出來てゐる。故に一元化といふことは世界性と合はない。只文化は、一時の吹く風の如く一氣に世界を一つ風に吹き靡かせようとする、然かも、各地亦各地の風があつてつひに一色、一風にならないのである唯性には

共通

差異

の二つを看る。

共通に差異を加減して加はへて一色一風にすることが出來る。

憲法政治の初期には何處の國でも、民主共和の憲法政治であつたがそれがいつか各國各地の特異性に阻まれて特種の憲法政治が出來たのであつた。經濟の理法にも亦此理法が行はれやう。

世界の經濟は共通にいはるゝ中にも其國の國情から、公定相場を下し又外交の關係を利用して低物價で押して行く。

故に、今一元化は、共通性と差異性を混じて然るも、つひに差異性は共通性の上に置かなくてはならぬ所もあらう。

近頃流行の我官僚政治は、たゞ統制强化に、餘りに盲目的で、たゞ一元化ですべてを律しようとするは間違つたことである、既に憲法の一元化が日本の如き特異性憲法の發生から、憲法は歷史と終始することとなつてゐる。

如何に支那の各性を統制するかにも、この特異性といふこと深く考へられやう。

8　ヘッゲルの辨證法

マルクスのボルセヴキズはヘッゲルの辨證法から出て來てゐるといはれてゐる。七十年の戰役にヘッゲルは我書齋に閉じ籠つて、讀書中戸外、人々の喧騒に、窓を閉けば

「獨逸がセダンに捷つた」

ヘッゲルは「ムムさうか」と、いつて、其まゝ無言で戸を鎖めたといふのである。これほどに、學理を研究してゐた人であるから、學理上の詮證には、いふ所ない人でなければならぬ。

然るに、茲に其人の辨證法が眞理に外れてゐるやうなことはあり得ないと思はるゝが、我等は何となくこゝに疑問を存ずる。彼れは、一二を得れば一二の間から三を得べく、二三の間から亦四を得る、段々、さうして眞理に達する。輙ち最限なく眞理を護られ得るとかくいふのである。然るに、人間己に性に有し、性に限度がある以上、

限度以上には出られないのであるに、ヘッゲルが、こゝに氣が付かず、最限なき研究をいつたは、間違ひであつた。

竟に、マルクスの如きが跳び出て來て、人力本位に科學を研究し、つひに人の性及び心を閑却し、マルクシズムの如き、人の性に忤く學問を創建したのであつた。

故に、世界の破壞マルクシズムを葬むる世人は、マルクシズムの根元たるヘッゲルの辨證法を排斥すべきである。

科學者が、唯物的證據を根據として人の性と心を問はず、祇、細々研究に入るは、學問其物の自立性を沒却する。

夫の、美濃部博士の如き機關說亦、其一つであつた。

國家は、人の集成的團體でも、其本性は生物であつて決して團體でもなければ、法人でもないのである。團體法人觀を捨てざる限りは元首は機關となる。

生物學上の生物は、其存在體に限られたる限度があつて國家の如き大々生物にはいふ可らざるも唯心科學といふものゝ上に扱ひ得ば大き物にも生物といふことといひ得ら

れやう、群虫（人）の集合性生物にいはるべき國家を生物にいひたりとて、不思議はあるまい。

唯物科學體形からばマルクシズムが完全であると世にいはれてゐる。而して科學の神はヘッゲルであり。且つ、人生は固物心二者から出來てゐるのであるから、ヘッゲルの科學、大修正を必要とする。

たゞ情けないことは、ワシントンでも、ロンドンでも、さうした世界の政治的グループに、未だ政治的ヒロソヒが淺く、只ヘッゲルの科學萬能に深醉して、こゝに人間の本質卽ち人間性に明かでないことである。

物が有つて智識が役に立つべきに卽ち今、人間が破壞せられて、何の經濟學が成立する。マルクスの外道學はヘッゲルが母體であるといふのであるから政治的グループは、先づヘッゲルを葬るべきである。

世界は萬物の上に集積せらるゝ、然るに萬物は格々咸性に由つて生きて行く性に忤くは亡びる。

政治は、勢ひから出來るとすれば、こゝに

力

が第一である、然るにまだ勢ひは一時のことで、本は性であつて性から道が出てくるから、道に踰ぐる力はないのである。

故に政治は

道

であるといはなくてはならない、科學は、文化であつて、道に循ふべきである。

9　岩倉公と玉松操

日本の維新には、幾多の矛盾があつた。

例せば、立憲政治に於いても、自由改進の民權者流のいつてゐたことには、日本の性及び國體に忤くことが多かつて甚だ亂暴極ることであつた。

板垣退助が岐阜の演說は、ルーソーのいふことを其まゝであつた、小學校教員相原

某が怒髪天を衝きて板垣を刺したは恂に止むなきことであつた。

又其交、山陽の學者西毅一が自由黨幹部と國體論にて衝突し歸宅後自刄したといふも、誠に氣の毒なことであつた。

大井憲太郎は佛蘭西學者にて明治二十年の日、既に普通選擧を唱へてゐたが中江兆民亦大井と同じく佛學者にて佛國風の人權論者であつた。

江木翼は、議會中心説を叫び德富蘇峰は平民主義の歐米論者であつた、この人特に變節改論に上手で葵の花の如く陽光の光りにつれて説をかへる。

然るに明治の日、岩倉公の侍臣に

玉松操

があつた、この人、山陰の國學者大國隆正の門下生、夙に大義に通じ、明識を以て岩倉公に事へ、後明治

大帝

に君側の榮を辱ふしてゐた。

岩倉公が、大義に封い、始終正論に循ひて徳らなかつたは、玉松の献替からであつた。

10 フアシヨ論

デモクラシーからいへば、君主制國家は往々人の自由を侵し自然性に忤く。惟、日本の如きは自由を認めて自然性にも合ふ、かうもいはるるのである。

たゞ乍去國家は、人の集團的生物ながら、人の動きが一々性に出でゝ、時の勢力を造くる。かうして爰に治むると治めらるゝを生じ、又一々集團が上層、中層、下層を看る一式一樣の平等觀はいはれない。

然るに、デモクラシーは、一式一樣に、平等で行きようとする。つひに政治選擧に於いても、普通選擧の如きを生じ、則ち社會の現實に反いて平等性で律しようとする、こゝに無理がある、人の現實に忤く、故に佛國革命が與へた、人權革命は、政治上失敗であつたといはねばならない。

全く彼れは人の性を平等とする。各人各性は決して平等でなく、上中下に岐る、惟、

本能は平等でも、性で岐れ、文化で岐る。政治が平等でない譯である、佛國革命の人權宣言は、唯本能をいつただけであつて政治性をいつたものでない、後年の佛國がいつまでも、これに拘はれて、マルキストにかぶれ、同じくデモクラシーに醉はされてゐて眞の政治性に目が醒めないは、このためである。

カアペンターの言に

「日本は制限選擧の邦にて、立憲政治の上にては、いふ所なかつたに、曷くんぞや、これを普通選擧にしたのか、近時ヨーロッパの行詰りは、普選からである」

かういふのであつた。其頃日本は、原敬の政治であつたが、原は

「政治は、秩序を趁ふを大切とする、段々選擧權を擴張して行けば良からう、何もヨーロッパやマルキシズムの眞似をしなくても良い」

然るに、犬養、小泉、永井のハイガラ連中が狂氣の如くさわぐのであつた。然かも、彼等は普選は、後ろにボルセヴキキのバックのあるに、氣がついても平氣でをつた。

デモクラシーの本場、米國にても、其頃治むるものは、國家の上優越權を持つてゐ

なくてはならぬとして、大統領に委任權を、さゝげてゐた。故に、單にデモクラシーといふことは、これらに稽へても政治性に合はぬことが判る。孔子は、人民には知らしむ可らずといふやうなことを云つてゐて、又ブルンチエリーの如きも、又其ステートセオリの中にて、政治權が餘りに低下しては政治にならぬといつてゐた。

一人一意思を本に社會を建てゝ　人民合議制の國家は、世にいふ共和制にてデモクラシーの邦土であるがそれにしても、かうも、人民各階級の關係から、大統領には優越權をさへ持たせるを妥等性の政治にいはるゝのであつた。

然るに、又英國は、名はデモクラシーでも國の本質が貴族主義にて主機は、君主と人民が半分宛所有し、いはゆるハーフ、サヴエレキンをいはれてゐるから、この邦が、全然デモクラシーの邦でないことはいふまでもないことであつた。

且つ社會勢力は、又政治原理の中に入れて研究すべきものなるが、この社會勢力は、自然其處に不平等態制を樹てゝ、必ず英雄を出し、人材を出し、有力者を生ず而してこれら、其々集團の中心人となる、かうした勢力を亦政治原理に加へて云へば社會の

政治性は指導であつて自治卽ちデモクラシーでないことをいはるゝ、且つデモクラシー原語ラテインからは、デイモス、クラスである。デイモスは民衆クラスは階級であるから「人民の爲めの人民の政治」ではなくして「人民の爲めの政治」に幾いのである。

支那は、世にデモクラシーの邦國といふのであるが、こゝに仔細の研究が必要であるのであらう。

老子は、道を天に秉り、自然法は卽ち天から奠まつたことにて、人間の辿るべき道であるといつてゐる。乍去この人、佛說の如く虛無を原として原の形ちに現はれたるを道と命づけてゐる。則ち人と天の關係を云ひて、別に支那性を其亦性から出づべきことに云つてゐなかつた。孔子は、人の世に倫理を現實的に說いただけにてイデオロギーには餘り觸れてゐなかつた。孟子は主に政治を說いて、天の本體は仁であるとして、仁政を說いてゐた。

故に、支那は、固定的に、デモクラシーの邦といふことは、未だ彼等の間には說いてゐなかつたのであつた。

歷史的に曰へば、支那は黃帝、堯、舜、禹時代を經て、近代元、明、淸にかけて、君主制國家であつて、決して民主制ではないのであつた。況んや、デモクラシー的民主制は、人民に個人權あると同時に個人道德の存在を本とす。然るに、支那人は、時の勢力に靡き、且つ巧利我儘にて、唯仁政を仰ぐ詢に治めらるゝに。最適の國民であつた。故にこの國民を驅つて自由共和の民にいふは如何萬一、大勢上共和制に出つるも、中身は强化自治で、いはゆる制を正として然るべきである。

況んや、廣大地域中に、

黃河

揚子江

が橫はり、地域亦南、中、北に分る。且つ況んや亦文化低く、殆んど、蚯蚓の如くナマコの如く何處が頭腦やら、心臟やら判明せざる邦土に昔、希臘のアゼンスに發達してゐた。文化的デモクラシーは、いはれざることであつた。唯、近時のヤングチヤイ

ナが、歐米に見學し、遇々、孫逸仙の三民主義に醉はされて大デモクラシー國を以て任じたことは非常に不心得の至りであつた。

老子、孔子、孟子等のいふ天道は、共和制の據るべき道であるとしても、この道亦君主制の下、政治原理に迎へられて、仁政化となればよいのであつた。故に、支那は、支那の歴史にたづねて、地勢に據つて天下を宰割し、則ち分轄的統制統治に出づ可きである。

日本は
赫々天皇
を戴く御稜威おごそかに、九天九地に、かゞやく。
天皇の「しろし召す」大御心は至仁至厚にまします。世にファッショをいふものあるも、ファッショが萬一我政治であらば沛然として出てくる人才を埋沒し、又議會を如何、乃ち
天皇の御稜威は、恰かも天日の照々たるが如く

上御一人
を中心に、すべての上に熙育を垂れ給ふとも拜し奉るべきである。

故に此の下、日支親善あるか支那は、こゝに至仁至厚に浴するものとしなくてはならない。

固より、我古典には、我皇の「しろし召す」に「天つ雲のい行く限り白泡の止る限り」をいつてあるも、これ太陽が照らすに萬物を各性に其所を得せしむると同じことであらう。

宇宙教と政治教は同じではあるまい。
國際政治は、各國の主權を尊重す。
既に我皇、世界萬國を認む。
故に、明治大帝の御制に
よもの國皆同胞と思ふ世に
なに波風のたちさわくらん

又後龜山天皇は、蒙古來の日「降伏敵國」の額に、降伏すではない、敵國から悅服したとすべしとして敵國降伏と書かせ給ふたのであつた。至仁至厚の大御心を拜し奉つるべきである、

11 共産ロシヤ

人肉を啖へば、額に角が生へてくる。

今日にても、南洋人喰蕃族の中には、角の生へてゐるがある。

文王の囿は方七十里であつても、仁政を布いてゐたから、四方咸な怡服してゐた。

然るに、共産ロシヤは

(一)人の自然性を沒し、人を皆共産的統制の器具とす

(二)私有制財産を沒す

(三)人の信仰及び宗教を廢す社會から人の自由を幻滅す、故に天賦を沒し發明を亡くす。隨つて社會各人に競爭心なく、つひに競爭に立遲る。

(四)共産的統制は、到底人の世に秩序が、樹てられない。

(五)世界を同じく一つの共産ポルセヴッキ化に引直さなくては、國が立たない。則ちこれこゝに世界侵略を主義とする。第一、第二、第三のインターナショナルに出てゐる所以。

(六)世界は、各自其性と其又制度を有す、共産共有一色の世界になり得らるるものでない。

然るに、これに反いて出來てゐるロシヤは、全く世界の鬼である。惡魔である。人の自然性を破壞して、如何して國家成立する。此頃、いふ支那の共産化は、ヨシ鬼になつても、抗日が出來得ばとでもいふのであらう。無茶苦茶である。

12 我將士の力

みするまの五百津眞玉をかけて、祈るらく。我神世の氏子は、誰れも、彼れも、海ゆかば、水づく屍、山ゆかば、草苔す屍ねとあるからは、このたうとき生命を一向塵芥視して死を視る歸するが如くあるは、固より其所にて、これこの度の聖戰に、世界

を撼かし天地の神々を泣する所以にぞある。

乍去、我將士のかうした、天晴、たけくいさましき、所詮、次の五つの上に數へ立てらるゝ。

（イ）日本人としての本能

我大和魂は、本性、必らず敵を組敷く、負けないといふ心持を有してゐるといふべく、これ我日本の特異性にいふべきであらう。この特異性が、國の傳統に結びついて今日我が强があるのであらう。

（ロ）傳統

八幡太郎源義家が夫の赤い緋緘の甲冑を着て、金鞍肥馬源氏を率ゐて前九に安部氏後三に清原氏を征伐したる其勇武は、其頃描かれたる繪卷物や市井の物語り本に傳へられ、後又源平の合戰に、義經の一ノ谷、能登守敎經の八島の弓勢、還た其勇武傳へられ、次に戰國時代、明治維新をかけて、同じくさうした勇武譚が、數限りなく語られ、かうしたことが、自づと日本の傳統となつて、これ今日將士の勇武化となつてゐ

るのであらう。

（ハ）日本の文學化を讃へて

然るに、日本人は、情操の美しく、從つて、克く時代に應じて、文學が發達し、文學はこれらを消化して文章に詩に歌にものしてゐる。これが、久しく日本を感化し、則ち將士の勇武はそれから出てゐる。物語本稱すべく、琵琶もいふべく、義太夫亦いふべきであつた。殊に劇作の如き尤もいふべきであつた。故に、大近松の如き、武田出雲の如きは、日本物語りの上の神樣である。將士の人格、勇武の大半は、それから出てゐる。

（二）敎育勅語

明治大帝は、畏くも、其聖代毎に、敎訓的勅語を下されてゐる。別して明治四十一年十月の戊申詔書は、津々浦々の小學校に奉讀せられて、大いなる感化を布かれたのであつた。故に

皇室

乃ち國家也の觀念は、國民の頭上に滲み込んでゐる。かうした勅語、詔書が、何程、日本の忠義心を悛つたかは、いふまでもないことである。

（ホ）氏神様

日本は、元より神國にて、肇國と同時に、其處此處に建國に、功勞あつた神々が、氏神として祀られてある。氏神は、一々姓を統べてゐる。護國の神である。氏姓の神といはるゝ所以である。

故に、人民は、何事も、この氏の神を中心として其鄉土を開く。吉凶、禍福咸なこの神に祈る。這度の聖戰にも軍事一切は、此事を本としてゐた。卽ち氏神の御輿は、神體のまします所としておごそかに拜まれてゐる。將士は、いづれも、氏神を拜みて次に二重橋に出でて

上御一人

を拜むのであつた。

（一）英雄、仁人、學者の感化

菅原道眞、平重盛、北畠公、大楠公は、仁人であり忠誠の人である。藤原鎌足、豐臣秀吉、德川家康は、英雄である。

學者としては、世々の大江氏、中江藤樹、熊澤蕃山、新井白石、萩生徂徠、本居宣長、佐久間象山、藤田東湖、吉田松蔭、新島襄、福澤諭吉等をいふことが出來る。

而して、かゝる英雄、仁人、學者が、何程、日本の感化力を布いたかは、いふの限りでないのである。

故に、今日將士の活々した忠君愛國は、これらに負ふ所が多いのである。

故に、國家は、ヨシ時の政治、產業の力を藉らなくても、其傳統力と感化力の上に、國家を立てゝ行くことが出來るといひ得らるゝ。乍去、今日の傳統感化は、次の又傳統感化を起すことの必要に鑑みて、今日の國民は、次の國民の上に次のさうした傳統感化を紹繼さするために、ありとあらゆる美事を物語文學として書きのこす必要があ

る。

13　支那と傳統感化

支那は、いふ所の傳統感化からは、山の如く多くこれを持つてゐる。老子、孔子、孟子は其一である。

黄帝、大舜、大禹、管仲、周公、文王亦然りである。

然るに、近來支那は、かうした重大なる國寶を泥土に委して顧みずして、只唯物主義に深醉して、只利己慾の民族化となつてゐる。つひに國土を擧げてたゞ我生くる犧牲に任してゐる。今日、國を焦土化にさゝぐる故あることであつた。夫の孫の三民主義の如き、支那を巧利化の禽獸にした。

14　支那を如何する

顧つて、支那を如何するかには、我等これを左の四五の上に數へて見ようとする。

即ち

（イ）支那性
（ロ）君主か民主か
（ハ）强化仁政制
（ニ）宰轄政治制
（ホ）支那の歴史性
（ヘ）宗主權
（ト）中々の良民
（チ）女
（リ）金融と軍備
（ヌ）教育

（イ）支那性

釋迦のいはるゝ如く、世界は無始無終でいつから始まつて、いつになつて終るやら

解らない。

たゞ其中にて、支那は中に二本の大河がある。三の地方がある。二本の大河は

黄河

揚子江

三つの地方は

北支

中支

南支

である。

先づ最初に開けたは、北支にて、黄河流域が其中心地であつた。而して、其頃北支には種々の人種がをつた。匈奴、日本人、フンヌ、チエンビトルクス、ウイグル、セツチー、梁、契丹、モンゴル漢民族其他幾土着はそれであつた。

而して、其中にて漢民族は、其五分の四を有し、黄河から張家口にかけて棲居し、

河北、山西を中心に、後愈々大きくなつたやうである。

人間は、如何なる人種であらうとも、直ぐ喧嘩をするが其智性で、支那はいつの間にか戰亂の巷と化してゐた。この戰亂には、漢民は、衆も多く、卽ち住民の五分の四も有してゐたことであるから、東夷西戎、蠻族は、皆打負けてしまつて、つひに、支那は漢民のものとなつてしまつたのであつた。史上にいふ啄鹿、阪泉の二大戰役は、この頃のことであつたらう。

當時、我日本民族も、黄河の沿岸に根據して、後打負けて海上に逃れ出たといふのである。故に其頃の大古史を說く人は、堯も禹も日本人であつたとさへいふのである。

人は物で、物乃ち性である。こゝに、支那人は、如何いふ性格の持主であつたかを少しく原始から調べて觀やう。

黄帝は、支那開祖の聖人であつたとするに、この帝に無爲而化をいはれてゐる。無爲而化は「何でも爲さぬでも宜しい、其まゝに放任して置いては何とかなる」といふのである。天に任せ地に任せて置け、水は井を鑿りて飲む、粟は禾にて喰ふ、これだ

けで澤山といふのである。かうしてゐる中に、何か人間であるかゞ判る。こゝに性を知るとかういふのであつた。

世界の上、性に各性あるははじめからのことで、後、人種、地理、習俗の關係から、これが明かになつたといはれやう。支那性に、

無爲而化

をいはれてあるは、支那性の原始であるが其中の、自由、我儘、自大心は支那の本性で、殊に如何に、自由、我儘かは今日女性の跋扈にこれを證明せらるる。

（ロ）君主制か民主制か

堯、舜、禹の時代さへ、既に君主制であつた。其後、周、秦、楚、或は唐、元、明、清時代も君主制であつた　故に、支那は、君主制の國であつたといひ得らるゝ。

大古既に、支那の傳統に

「無爲而化帝力於我何」

老子の道ふ、道とは、人は人とてし寢たり起きたりしてをれば、自然、人間の形を

爲す、この形ちを爲すをこれにいふのであつた。

然れども、かうした道とは「人と天の關係をいつた」ものであるが更に人は、知能性を有しこゝに社會力をつくる。而して社會力亦人を制御する。つひに人は天性に順ふ以外、社會性に順はなくてはならないことが多い、これが近世政治文化からくる原理である。

然るに老子も乃至孔子等も、唯唯心學に沒頭しいまた物の生長利用に考へがなかつた、則ち唯物科學の理に氣がつかなかつたは惜しいことであつた。

故に、支那の政治性如何は、歷史性にいひても社會性にいひても君主制天道政治であつたといはなくてはなるまい。

（八）強化的仁政

孟子は、人の性を善に說き善は卽ち仁であるといつてゐた。扶け合ふ、樂しむ、笑ふ、歌ふは、人の性を健全にする本であるが、これらは善卽ち仁であるといふのであつた。

故に、支那の政治は、仁を本としてゐる。

禹の政治にしても孔子の倫理にしても、還た皆仁であつた。

されば、これからの支那の政治性は、仁でなくてはならない。但仁也、天から出づると個人自心から出てくるがある。又統制者からそれが出てくるとがある。

個人自心から出てくるは、デモクラシーである。個人自心が中心となるには、個人に文化が發達して道德の規準がこゝに樹てられなくてはならない、然れども、社會が未發達か或は民族に、自由、我儘、自大心の强きは、さうした中心となり得ない、かうした人民を中心は、攻伐を事とし匪賊の世となつてしまはう。故に支那の如きは、統制者があつて、天道を體して强化統制に出づるが最良の方法であつた。

唯、强化統制が、愈々行過ぐるは、人の自由を滅し、從つて發明を沒し、卽ち創造力を亡ぼすことゝなる。或は、かゝる諸力は、統制者の側から出るといへば、こゝに國家は政治機能だけであつて、社會力は滅燼することゝなる。跛足的で、完全ではない。

さうして行く、今に個性は皆國家の器具化し、人間性を愍ぼしてしまはう。ボルセヴッキにいふ非難を此上にいはるゝことゝならう。故に强化統制は、人の性を本として、それに乖ぬやうにして然るを希はれようとする。

（二）宰割統制自治。　（ホ）支那の歷史性

河山を宰割し、各地地勢に據つて、各地的國家を建てゝ分轄的支那を造るが、大支那統制に尤も適切なる政治であらう。

地域が狹くば、人情廉耻の念を生じ、自然道德が起る。これまで一統支那よりは分轄支那が有利であつたは、この爲めであつた。

更らに、支那の歷史性からは

「支那性の自由に任せて政治に出づる

決して干涉せず」

元、明、淸、の政治は、尤とも、支那性を支那の自由に放任してゐた。故に、日本の統制政治は、分轄も自由放任を大切としよう。

惟、各地民族性を異にす。便ち、此上に共和支那を建つるも、實相は仁と强化を本としての統制政治に落つくべきであらう。かくて、近代の元の賢明政治等を參酌しやう。

（ヘ）女

傾國傾城の語がある。如何に美人の國乎はこの一事で解る。

只女が威張つて跋扈する。姐妃、楊貴妃、西施等が在つた所以である。

長江の上には、種々雅致な舟遊びがあり、殊に男女間には閨房學といふやうなものもある。

いづれの國民も、支那に入りて久しければ、やがて支那化をいはるゝは、女の勢力のためであらう。

（ト）中中の良民

五千年からの古い建國だけに、其民人の本質には

（イ）文化

（ロ）秩序的

（ハ）信義

（ニ）勤勉心

これらを數へられて中中の良民である。孔子が、永遠支那の聖人として祀られ、其他幾聖賢の迹が尊崇せられある皆この爲めである。

（チ）外交權如何

折角、大々自大主義の大支那に、宗主權國を其上にかぶせるといふは、人情太だ忍びざることであり、また支那人の面白く思はぬことであらう。

既に、日支親善、日支提携へスタートを切つて今日までも來てゐることであるから、大まかに東亞健全主義の下、日支親善で一貫すべきであらう。但姑らくは、日本を父國或は盟主として、外交權の如き日本の左右に任しても良からう。

（リ）軍備と金融

支那大陸の經營中樞の一つは、通貨の一定することである。隨つて一日も早く、中

央金庫の設立を期せねばならない。これ具眼者の齊しく叫ぶ所であつたが、近日はそれが出來て法幣もバーとなつた。

苟くも日支親善、提携の手前からは、支那は、決して日本の扶擁國でもなく亦宗主權でもあるまいから、獨立國の性能として、相當の軍備は必要である、祇東亞の平和を虞るゝ意味から、互讓一致、或る制限は止むを得まい。則ち全支那としても、或は分轄的支那としても、日本の希望の下、姑らくは、制限軍備が定理であらう。

（ヌ）教育及び交通機關其他文化

國家は、これを近代にして、彌々教育が重大である。

人が、育或せらるゝ。育成せられ得るは、國家當然の任務である。東亞の山河が悉く文化に輝くは、神への尤も忠實なる勉めで、埃及のモーゼ以來、必らずかくあるべきことである。

但、既に埃及に、アッシリヤに、希臘に、數學が發達し、次に歐米に、ニュトンの引力、又ワットの蒸汽力が發明せられあるに、支那には如何して科學が發達しなかつ

たか、これ、歐米にては同じ繪を描くに、細かく一本宛線を引くに、支那は、斷然太い一本の線で全體を表はす。かうした方法に、さうした差を生じたか、或は、支那には、學問が惟修身齊家に專らで、況んや、物資の豊富から玆に中原の形勢を定めても亦科學慾なくして、此に至りたるか、疑問である。否、唯心人間學と政治は、唯物科學を疎んじて、こゝに到つたといはう。

故にこれからは、唯物科學の上、唯心科學を加へて、新らしい科學を造ることが、これから支那の責任であらう。新教育は、こゝに重點を置いて、貫ひたいのである。

次に、交通機關及瓦斯電燈の開發は、いふまでもなく、必要のことである。

15 門戸開放

門戸開放は、嘗つて明治の交、ベレスフォード卿に由つて唱へられ、それから、それが世界の聲となつてゐた。

乍去、世界は、原則としては、各地各國を本にいふべく、若し然らずして單だ門戸

開放をいへば、世界から邦の獨立性を認めずして、恰かも植民地の如くなつてしまはう。

昔時、英、佛、獨、伊太利、スラブ、マギャル等が亞米利加の新開地に、出稼ぎ勢力を張つた、一七六〇年——一八〇〇年頃の世界は、亞米利加に、印度に、南洋は皆新開地であつたから、其頃にては世界の各地はヨーロッパの前に、一々門戸開放がいはるゝのであつた。

然れども、世界文化が段々發達して、今日、何が人類の歸趨かゞ、瞭かとなつた以上、各地各國も研究せられ、成るべく獨立國を大切として、從つて、門戸開放の如きも、控へ目にいふべきことゝなつてゐる。

支那は、中華民國、況んや、日支親善の今日は、ヘレスフォードの如き、臆面もなき門戸開放は、いひにくいことである。

乍去、資本には、國境なしであるから、資本が、世界の隅々迄、海を超へ山を越へて注入するは、止むないことである。故に支那が、こゝに宜しく門戸開放の下に、列

國の資本を歡迎するは、いふまでもないことである。然れどもこの門戸開放が昔時一時新開地に武力をバックとして然りたると同じことにいふ可らずして、只この事產業開發上の相互利益を中心に、然るべきまでであるといはなくてはならぬは、いふまでもないことで決して、邦の獨立性を戕害してまで、然る可らざるは勿論のことである。

然れども、ヨーロッパの支那開發は、往々にして門戸開放を、新たに我持物をつくる意味にて然りようとするは、間違つたことである。

蔣政權は、這次の日支事件の利用から、列强國に諸多の借款をつくつてゐるが、既に沒落蔣政權は支那の主權者でないから、新支那の政權の下これを引繼がざるは、理の當然で、いふまでもないことである。

16 日滿支

世に、法律語に、正當防衞といふ言葉がある。正當防衞は、生物が、生存本能から、こゝに出づることであつて應さに、其權能である。神の法庭には、神は笑つて許容す

る。

ロシヤのボルセヴキツキは、世界の鬼であつて、則ち、これまでの世界は、人間性如何でも、今ボルセヴキツキが新たにつくる世界は人間性に忤いても、ボルセヴキツキ性に適するそれをつくるといふのであるから、一旦この世界を引崩して、今迄人類が覩たことのない世界をつくるといふのである。故に、やがて各國家性を沒ぼし、帝王、君主及び自治性一切を罔くしてしまはう。これは、全く破壞である。

大江山の角の生えた、鬼が、三十貫目の鐵棒を揮り上げて、世界を骨破微塵に打碎かうといふのである。

かうした破壞に、英、佛、米は其唯物巧利の墮落からたとひ鬼でも利害相合ふ間は、提携しても構はぬといふのであるが、日本は、かうした鬼は斷然撲滅を期する建前から、茲に日、支、滿を打つて、一丸の合體として、撲滅に出で、更らに、また日獨伊三國の防共協定をまで强化してやつてゐるのである。

17 老子、孔子、孟子

人間は、新らしいことを好めど、この新らしいといふこと、際限なく。旻天に愬へていへば先づ我性をいはれ、而して性の裡、人間亦生々死々するに則ち生は還た際限なく新らしく、時代に新らしく、子供に新らしく賢愚に新らしく。たゞ新らしいは性則ち眞理ぢやないと知らなくてはならぬ。

性以外に新らしきを求むるは、我棲む世界を星界に換へ、空中に換へ、更らに、世界外に換へなくてはなるまいがさういふことは、到底我等人類界にては無緣のことで、いふの限りでない。

老子は、釋迦と同じ時代の人の如く、印度にては釋迦であつたといはれてゐる。

而して、老子の道ふ道とは、所詮、人間の性をいふことゝなるのであらう。然れども、性乃ち、道に形體なく、變幻の中、理に膺るを道といつてゐる。故に、この道或はマキアヴエリの如き權謀ともなる。

孔子、孟子の中、孔子は、倫理、孟子は仁で、倶に政治學であつた。

18 三民主義

孫逸仙は、老子孔子の亞流でもなく、新支那時人のヒーローであつたから、其いふ所に、千古の眞理がなく、つひに一時の善言、佳語に留つたは止むないことであつた。

彼れは、三民主義を唱へて

民族
民權
民生

をこれに云つてゐる。

民族をいふに、支那は、原始匈々の古い邦で、チグリス、ユーフラチス河畔に在つたメソポタピタミヤの邦も同じく。天與の天啓の邦であるから、全支那は、支那民族に固有するとあるも、支那が、全支那民族に固有は、いはれないことであつた。

世界は性を本でも、其存在體形は、時の勢力で消長す。孫の言、この理に外る。民權民生は倶に飜譯語。支那の古典にも乖く民權は平等思想に出でて個人主義支那制の破壞。民生は亦やがて共產主義であつた。

蔣等が三民主義を本に抗日排日は間違ひであつた。

19 國家論

風は、如何なる大風でも、世界を其起る風一色には吹きまくらない。

三四年前、關西に大風の起つた際、氣象臺の技師達は、

「恐ろしいもので、風も亦生物で胸もあれば、肢脚（手足）もある。胸に當つた所よりは肢脚に當つた收の方が烈しかつた」

かういふことを云つてゐた。

低氣壓の過ぐるに、長さがあり、巾さがある。さればたとへば海上を走るに其迹黑くなつてゐて。何處からでもそれが、見らるゝのである。

國家は性を本としても、其大小は本固有力に由るも、亦時の勢力で決する。而して勢力如何は、低氣壓に同じやうなことも多からう。而して、性を本にいひて、こゝに民族の上

本能
山河

のこの二つは、到底、永久不朽不滅のものゝやうである。

アリストトルは

「人の神への最高の仕事は、國家を建てゝ行く上にある」

然れども、我等は、これに百尺竿頭一歩も二歩も進めて

「人は、人が人の性上一人であるべき筈が決してあり得られないのであるから、集團生活其物のそれで乃ち人である。集團體卽ちさうした生物が人であると斷言する。故に國家は、人の集合體上の成立物でなくして、國家卽ち人であるといひ得られよう」但、本能が性に外れては鬼である。破壞である。

近代、國家學者は、唯物科學から

土地
人
統治主權

の三つの組合の上に成るといひて、法人團體をいふも、これは、法理を就さぬ言葉である。

固より、世界は、一つ魂に流れて行く筈なるも己に各地各性を看、又風土化成に還た習慣性を效す。世界に一元化はいはれないこととなる。

かくして、斯に差異差別あるは、さやうにして、はじめて世界は運くからである。則ち各地各性は、世界に運きのある所以である。

但、人は、草木の如く定着せず、又諸動物の如く性其まゝの單純でなく、彼此れと生動し、中には鳥の如く空に飛び、魚の如く水をくゞる。盍し智能を有するからである。絶對に性に離れないは、一旦如何なる文化に出でても後には、また本をたづねて

性に反へるに知らるる。

20 支那浪人と名士

一時、支那の名流は、亡命者の如くして、皆日本にやつて來て、或は在學してゐたり或は浪人してゐた。

然るに、彼等が周邊は支那浪人を中心とし、名士といふはいづれも時の豪傑で、芳ばしからぬ人達であつた。

故に、彼等は、東洋風の豪傑、謀反人、野望さういつたやうの感化以外、別に深味のある良い學問、教育を受けなかつた。

海上の波に底波と上波がある。底波はスエルのことで、底深く搏つてゐる、ニュースは上波の如き名士を語り傳へるが、底波の如き深い人は殆んど知らない。彼等は、ニュースを光明に、名士をたづねてゐた。あやまられた譯であつた。周の武王は大公望を巖穴の中から呼び出した、武田信玆は今川の、足柄長屋から、山本勘助を召ひ出

した。

21 中心

亞米利加の人達は、ワシントン市を、キャピタルの名に呼びて、我が中心地にいつてゐる。

世界は、何處が中心かは、むづかしく大古、佛蘭西の一哲人は、小童に石を抛り投げさせて其隕ちた所を中心地にいつてゐた。何處から觀ても圓である世界はさうでなからねばならない。

諺に「我佛尊し」があるに、これからは我主觀中心が、中心となる。

南北の極地の外は、何處からでも中心であらう。更に、勢力信仰の中心から中心をいへば、ヨーロッパはキリストを中心とし、東亞は釋迦、マホメットを中心とし、日本は固より天皇を中心とする。

世界亦巨きい生物にて、目、鼻、口ありとすれば、日本は、目に當り、他亦夫々其

宅る所があらう。然れども、今、これをさうした生物にいはず、ヨシ生物でも、複複的細胞體生物とすれば無數の生物を其中に數へて、其各々の辻を中心としやう。

22 人肉化の世界

蚯蚓の小便でも、小さい水である。これに較へては、汨々長江は大きい長い水。アマゾン。ミスシッピ亦其中にいはるる。

〃詩人は笻を曳いて川原を究はめんとして、つひに千里を歩し、然るに千里の涯、川原なく。やがて山に入り、雲に入る。嘆息して曰く

川原入レ雲。

玄く深くいへば、世界は

性

體

の二つから成つてゐる。

世に、文學の使命は、先づ性に知つて、次に體に奉仕するにあらう。然るに、蘇東坡の如き伯樂天の如き詩人の罔き世は、ただ體だけで世界を知りようとする。つひに唯物科學だけで生きようとする。

性に知らないやうになつては、世界の根本を打壞はしてしまう。今日の世界は侵やくこれである。人肉化の世界である。正に世界の破滅である。

23 國際聯盟及び國際公法

同じ時人の中でも、只だ生活を遂ぐるに過ぎざるがある。而して民衆とは大概かういふ人達である。

一七八九年佛國大革命は、世界革命として尤も大きいものゝ一つとして世に稱せられてゐる。然れども。革命が人生の根本を決定したものとすれば、さういはるゝは當然でも、佛國革命は、未ださういふものではなかつた。

この革命は、人生にさういふ役割をやつたものでなく、これは、單に、人權の伸暢

であつた。而して、この種、人間伸暢は、主として、時の惡政から出たものであつて、これに怒つた佛國人民は、人間の

本能及び性

から、其處に出たのであつた。故にこれ大小はあつても、仍ほ、日本の封建時代、大鹽平八郎、佐倉宗五郎の反抗も、同じことであつた。

世界は、決して人を平等均一につくつてゐない、人智、人格から、上層、中層、下層と岐れてゐる。各層を一丸に打つて、其上に行はるゝが政治である。故に、政治は、人の性を本とし、これに時の勢ひを善導するを肝要とする。然るに、佛國革命は、それまでのことはなく唯これ、人民の不平爆發であつた。故に人權だけであつた。卽ち本能及び性からであつた。

故に、佛國革命は、全體の政治性とは合はない、一部の政治性に合ふばかりであつた。

（一）君主制政治と合はない

（二）ファッショ政治と合はない

（三）政治性と合はない

これらを、これが非難にいはるゝ。由來佛國の政治が、人民の輿論、モッブを主權者の如くして、これらの聲に辟易して政府を交へて十年に十二三回も、內閣の交送が行はれて來りたるは、このためであつた。然るに佛國は、其交、哲學者にヘルヴエチユース、ルーソー等があつたが、彼等の云ふことは、人生の至理には觸れてゐず、只本能及び性、中にも政治性に疎であつた。フレデリック大王からヘルヴエチユースが、一學究として嫌はれたも、其邊の消息を語り、又ルーソーが只感情家取るに足らぬ學者はこの爲であつた。これらに續いてミラボー、ダントンが出て、つひにあゝいふ革命が起つたのであつた。

今日、佛國が、鬼のロシヤ、ソヴエートと同盟し、人民宣戰上の支持力となつてゐるも、このためであらう。

然るに、還た日本は、明治の憲法政治に、自由民權を佛國革命思想に酌みてゐたか

ら、いくらも佛國流の平等論者が多くて、民主制を主張してゐた。

唯、大隈一派は佛國風ではなかつたが、英國を手本に、議會中心を說いてゐた。

世にいふ「生るために生くる」は、また本能に卽した、いひことでもあるが、ロシヤの、ソヴエートの鬼は、全く「生るため」である。マルクスは、固より非凡の頭腦の持主ではあつたが、未た、「人間如何」及び、「世界如何」に研究が足らず人事一切を「生るため」から割り出し、また生るに、性を順ふを第一とすることに氣のつかなかつたは、全く、折角の學者としては氣の毒なことであつた。然るに日本には、多くの學徒が、マルクシズムにかぶれて、今日、累紲の慘苦に惱んでゐるのはこのためであつた。

世界は、誰れが統治の本體かと云へばこれまで世界は、キリスト敎は

神

佛敎は

佛

をこれにいつてゐる。惟、日本は

天皇

で、あらせらるゝ。

最も天皇は我が現神(あきつかみ)で、おごそかに權威あらせ給ふ。人間の性は、信仰を乃ち本とする、現神は、信仰の上に赫々とかゞやく。

次に、治むる人としていへば、哲學者及び思想家をこれにいはなくてはならない。然るに、人生は、噫悲夫で、時の權力者が往々これに膺る。權力者は時の勢力を代表するヒーローであつても、世界統治上の能力者としては第一第二の人達ではない、たゞ勢力關係からさうなつてゐる。

去年、紡績業大會がシムラに開かれた際、其處に出席した、我門野重九郎は一日我等に

「ナンバー、ワンが皆、我執であるから、たまらない」

かういつてゐた。世界の時人は、皆、「ナンバー、ワン」より他考へはないのである。

二十年前華府會議の時も、同じことで彼等出席者は、强國本位で、世界の平和を繩張しやうとして、四國協商を決定し、支那問題を解決したのであつた。國際聯盟が出來て以來、幾度かロカルノ條約が締結せられてゐたが、何につけても、我國第一が先に成立するから、根本的解決は出來ないのであつた。

然れども、既に神佛が出席してゐた譯でなく、況んや、哲學者及び思想家は、世界の片隅に喘がされて、取合はれず、漸く、自分一人の「生るため」を講し得るに過ぎざるは、則はち人として三等四等にいふべきで、それは、普通民衆に少し毛の生えてゐるぐらゐのいはゝ時人が出て、政治委員となつてゐるから、世界の根本も、人間性の如何も閑却せられて、カナリヤか雀か犬の舌合戰に。會議の終はるのは、當然であつた。

昔、德川の世に忠臣義士の事件が起つた、この時、德川幕府は、大石良雄等四十七士處分に、萩生徂徠を政府に延いて、徂徠の意見に因りて、死を賜つたのであつた。徂徠は、其頃東西第一の學者であつたから、幕府はかうして千古の規範たる處刑を行

つたのであつた。華府會議にしても。國際聯盟にしても、世界平和の大綱を決する。正に、世界の哲學者及び思想家を一堂に會して、其意見を中心に然るべく、時の時人の如き政治家は、其下に筆記者ぐらゐの處に用立たするが至當であつた。然るに、今日は、何の會議も時の政治家が出て決定す。世界の文化も、人間の性も皆目釋らずして猿か犬合戰に終るは、止むないことであつた、應に、これ世界の隨落である。

固より、世界には、各地大學がある、大學には多くの博士がゐる。哲學者も思想家も在る譯であるが、唯、今日は國家が强く社會が弱く。則ち學問が權力の頤使に甘んじ、故に大學が、學問の自由。世界性の研究に疎に、時の小役人も同じき爲政者の下に孜々たるは、則ち世界の運命の本を決する上に學問役立たず、一に政府次第に然るは、かうした低い態度となつてゐるからである。

故に、各强國の巧利本位から出來てゐる國際聯盟の如き、何の意味もないことであるから、早く解散すべきが當然である。

飜つて、國際公法亦同じく解消をいふべきである。國際公法は、久しく「法律なり

や如何」等が國際公法學者に云はれてゐたが、既に哲學に知るなく思想に闇らく、只公法の歴史に知るだけの今日法科學者の分際を以てして、世界の是非を論ずるは片腹痛いことである。彼等の存在は、唯公法上の歴史材料の活字引以外に、何の用はないのであるから、役に立たないは當然である。剩さへ公法上の歴史材料は、學問ではない、それは記憶だけである。今日、官僚が試驗委員でやつてゐる外交官試驗の如き、外交上の學問には用なく、只かうした記憶である。一冊の字引を見ても事足る、試驗の必要はないことである。さういふことをやつてゐて、時の人勿をこゝに取るといふ。木に緣つて魚を求むることである。其他、文官試驗に於ても亦同じく、學生は常に試驗官の著書の記憶である。記憶は學問ではない。故に、學生は試驗本位の記憶器具である。さういふことにて。如何して人間が判る。官僚卽ち器具は、このためである。

公法は、「法でない」といふは、國家が發した拘束力を附した法でないからである。國際間の制裁は、大體任意である。任意は、倫理である。人生の規準であるから法といはんか。然らば、人間五常は、皆法といふことゝなる。倫理は法ではない。たゞ、

神の規準が認められて、やがて、國際間に權力を生ずることに至れば或は世界の上、國際法は、法として存在することとならう。

國際法は元是れ、スエスの人、ヘンリーデユナンがソルフヘリの戰役を見て、其負傷人と同じく負傷馬匹の慘めさから、一念人間性に泣いて、世界の同情に愬へたがはじめにて、公法は出來たのであつた。然れども、近年は、强者の權利から、公法は强者の武器と化し去つて弱者には何の恩典ともならず、存在しても、何の意義をも作さずして、依然、世界は、强者の我儘と不正が勝手に行はるゝ以上、かうした法律は、寧ろ無いに勝つてゐやう。

抑々世界は、百年千年目には、大風、颯々起つて、天地を引くりがへしようとするが、しかも、

日

月

は、つひに、天から墜ちて來さうもなく、ヒマレヤ山又、宙に飛ばない、富士山も天

に揚がるまい、蓋、世界は、性を本とし、この本、宇宙と一體であるからである。

唯、今日、世界は、時の勢力に撼かされて時人が、時の指導者となつて、神も佛も皆滅し、唯我皇道だけが赫々輝くは、各地大學に、哲學者及び思想家亡びて、釋迦も、老子も、カーライルも、ヘッゲルも、トルストイもないからである。幸ひに大學が學問の自由を叫ぶからは、さうした權威を世界に出したら良からう。政治界亦宜しく神佛の如き大政治家を出すべきである。社會亦治めらるゝに、自覺して、社會力から、國家を制して行く、碩學を出すべきである。況んや今日の世である。我國大學の如き宜しく唯物科學と及びヨーロッパ物の飜譯以上、日本を學問の宗に拜みて、日本から敢へて世界の大光明をかゝぐべきである。

24 人種、風土、性

世界のことは、中々むづかしく、大きくいひて

人種

風土

性

を中に取入れて、併せて天文、地文をこれに加へて、論じなくてはならない。

故に、支那の古代の政治學には、必らず天災事變、昆蟲草木のことまでも具さに論究してゐる。

惟ふに、さういふことまで深く互つて論じようとすれば、天地は、一々性と律であつて、全く性、律に導ふて動いてあるやうに想はるる。

今日、日本の氣象學の如きは。氣象を、氣象科學に本を取りて、こゝに學理に據つて其上に、氣象を商つてゐるのであるけれども、氣象亦、生々生物で、各地に其氣象があつて、各地亦性と律の成立する以上、只科學的の氣象論は、如何しても間違ひがある譯である、故に氣象學の正しい判定は、各地に動く性、律から算定して來なくてはなるまい、かゝれば、時の勢ひに趨はれて、世界を一元化にいふは、此處からでも間違つてゐることである。

韓昌の後念九日、復上二宰相一書の中に

「愈聞周公之爲二輔相一。其急二於見レ賢一也。方二一食一。三吐二其哺一。方二一沐一。三握二其髮一。當二是時一。天下之賢材。皆已擧用。姦邪讒佞欺負之徒皆已除去。四治皆已無レ虞。九夷八蠻之荒服之外者皆已賓貢。天災地變昆蟲草木之妖皆已鎖息。天下の所謂禮樂刑政教化之具皆已脩理。風俗皆已敦厚。動植之物。風雨霜露之所沾被者皆已得宜。沐徵嘉瑞麟鳳龜龍屬皆已至。」

かういふことまでいはれてゐる。一元化は如何でも。或る地理上の分布內、亦種族間に限りては、性に共通性があり、又類似性があつて、いはゆる全體性にいひても可なるものがあるが。たゞ差別と差異間の取扱ひはむづかしいことであつて、異別から文化の元を異にし、それが、競爭上、推進力を起すを知らなくてはならぬ、但、百花あつて春がある、差異上に互讓一致あつて却つて人生の强大を看る。李斯の上書の如きは、尤も其原理を說いてゐる、大日本帝國の强大は、各人種の混合及び亦風土性の合體より、此に至つたといふべきである。

日本は、元を滿蒙族でも、百濟任那を經ていつか、韓民と接觸し。近年は合同してゐる。漢民も澤山日本に來て化合してゐる。

故に、これからの政治は、窮屈に徒、一元化に拘泥せず、人種、習俗、慣習に合せて、性と勢ひにくみて所々良政治を得ることである。

25 九ケ國條約

大正十年十一年の交、ワシントン會議にて支那に關係ある九個ケ國を中心として、九ケ國條約が締結せられた。九ケ國條約なるものは、支那の政治的獨立と領土的行政保全を尊重し、門戶開放機會均等の原則を約せるもので、この條約は、支那國を以て普通獨立國とせず、半植民國家であるとする前提の下に、さうしたことであつた。

蓋、普通獨立國ならば、他國より領土保全、又其の行政的保全、門戶開放を國際的に約定せらるゝ筈はない譯である。

其頃は、歐米列强が、世界を我物顏に動き、苟しくも乘ずべき半未開國には、慣例

としてかうした侮辱的行動を敢行してゐたのであつた。正に殖民帝國主義のいはゞ餘弊であつた。

我等は、當時、ワシントンに滯在してゐたが、歐米のかうした態度を片腹痛く感じ、凡そ、人類として、哲學もなく歴史もなく、思想もなき彼等、下等なる政治勞働者の群れを以てして、世界指導に志して、何が出來るものかと思つてゐたのであつた。政治は、元來

性

時の勢ひ及び律

を以て、本とし、而して、今只其勢ひからデモクラシー政治化を叫んでも、既に、各性と時、律に活眼なき無學文盲の彼等が九ケ國條約に出て、支那に繩張りは、全く呆れたことであつた。

故にワシントンからの歸途、偶々、横田千之助から、ワシントン會議の報告書を、全國各新聞に送るのであるから執筆してくれぬかといはれたので、即告承認し、それ

から其報告書に

「バルフォア、ヴイヴイアニ、ハーヂング、或は支那の顧維鈞等が出席してをられ、又日本から、德川家達、加藤友三郎等が出席せられてあつたが、堂々世界指導の出來る頭腦の持主は一人もなく、人としては低級の政治勞働者の寄り合ひであつた、ヨーロッパでいへば、ヘーゲル、クラドストン、リンカン、東洋からは孔子、孟子の類は一人もなく、雀か犬か牛の論議で、全く政治勞働者の力爭だけの會でいふに足りないものであつた。ヂヤスチース、ヒユウマニチー等ピース、フルの茶番狂言で、何の役にも立つまい。これから毎に生長する各國の上に、五とか七とか十の比率を置いて、首枷手械をかくることが、己に可笑しなことではないか、世界會議などは、これから五十年、百年先、人間が出來上つた上のことだ」

かういふ思ひ切つた議論を樹てて横田に與へたのであつた。

但、政治家は、幾年月を經ても救はれぬ約束のものゝ如く、今日にても、矢張り横田等と同じく、時の勢ひを驅る巧利本位の人達が跳び出して、やれ秋山定輔、やれ久

原房之助の如き鼠輩が跋扈して、一國一黨などといふ狂氣じみたことを言ひ立てゝさわいでゐるのである。

其後、日本に亡命してゐた孫逸仙は、同じく低級、無學の浪人連を先生として、つひに三民主義の如き、哲理にも時の勢ひにも合はない巧利主義の學問を造つて、蔣介石等を惡導し、これが抗日侮日を支那の教科書に植え込みて、今日の如き日支事件を卷き起したのであつた。故に、半植民地時代には、九ヶ國條約はいはれ得ても、近代の支那の如き東亞秩序の破壞者であるばかりか、進んで日本を敵國視し、全東亞を支那領土化せようとして起つた支那には到底いはれないことである。如何に巧利化の歐米も、些しにても、チャスチースの觀念あらば、九ヶ國條約は、神樣の前一言も口に出されぬ筈である。惜しいことは、支那の老子であつた。老子程玄々の大哲學は、其哲學から線を引出して科學を作り得ることであつた。只支那人久しく中原を志し、寢ても起きても巧城野戰から科學開發を忘れ、況んや、物資の豐富から此に出なかつたは全く惜しいことだつた。ワットの蒸汽、ニュートンの引力は良いことであつたが、

それが不幸人格なく猛獸そつくりの野卑の歐米と結びついて、こゝに科學が發達したは却つて世界のため悲しむべきことであつた。

26 支那の統制

世界は各地各性を本に、爰に民族が棲んでゐる。古くして一萬年、新らしくて二千年を經てゐる。

性の他に又、習俗性さへある。

故に、古來、英雄の征伐は、一時武力にて地圖の色を塗り易へても、性と及び習俗性或は本能は到底不可抗力或は合同、同化を看るだけであつた。

宗教の感化は、偉大であつてもこれとて、其本來の性及び本能を變化させることは至難である。

我弘法大師が、眞言宗を建てて我國體を本に、日本的佛教を弘めたは賢明であつた。

然るに、時人が、一時の勢ひに乘じて世界を一色にするとか統制强化で一統治にす

るといふは、全く赤裸空手で大元を拉へようとする愚で固より常識ではない。

況んや、世界は、今日の科學を裏切つて既に幾十萬年前から存在し然かも幾多の遺骨が發見せられあるに鑑みて釋迦のいふ無始無終も考へられようとするに科學、進化論は役に立たぬともいはれやう、たゞ可笑しきは、今日の學者である。無始無終の世界に年限を置きて一期二期、三期と層々を中に勘定する、故に其仕事に一二三四五と寄せ算の如きこと多く、五目ならべの如きことが多い。

人間を神聖生物の上からいへば天文にしても、政治にしても、軍事にしても「我感(かん)」で知ることが多からう、「感」で知つて、百年千年、萬年の世界を一言で決定する。眞の天才はこゝに活きて來やう。

支那大陸を如何に統制して行くかに新秩序の再建には、古來から　秩序を基礎に其上に新らしい文化を加へて日支親善の下に、支那を扶けて立派な大民族的國家に盛り立ててやるといふことを知るが、肝要である。

既に蔣介石といふ天性の惡鬼は、奥地逃避を企て、長江一帶の青年男女はこれに呼

應して、長期抗戰から

（一）　日支親善

（二）　ロシヤ依存

（三）　英佛米依存

を攻撃しゐるのであるが、支那が、今日不幸の戰禍より逭がれ出ようとするに、ロシヤの鬼と一緒になれば國土と人を擧げてソヴエートの餌食になるだけのことである、英、佛、米依存は、彼等から骨をしやぶられ血を吸はれやう。

これはまた植民地化とならう。幸ひに日本と日支親善に出るか、地獄で佛に逢つたやうなものである。日本の日支親善は、日本帝國主義の犧牲に供せらるのではない、日本はあくまでも、世界の中核たるべく大國支那を造り上げて倶に世界の使命を全うせんとするのである。

日本の渉外第一線の人達の中には二三、世界一呑みの如き大言者流あるも、我聖天子上御一人

は、昔時蒙古來の日、後龜山天皇が宣はせ給ひたる如く

卽ち

「仁

を以て、世界に莅み悅服を以て國是とする」におはします。

我等は七くどくいふやうなれども抑々世界は、固、物と心から成つてゐる。二者の支配が世界支配となる。然るに、ヨーロッパ文化は、キリスト敎は、宣傳で、直ぐ物に趨る。つひに破壞である。

然るに、今日の出先官憲がやつてをる一元化の統制强化は性と特異性の間を縫うて善處するのではなくして、只遮二無二この强化統制である。それでは日支親善が片手落ちであつて、自然支那性に合はないこととならう北支開發中支振興其他の開合辨事業に、支那が悅服しないのはこのためである。

支那の各特異性は、尤とも克く支那人が知つてゐる。故に、支那の治安は、支那人に委せて其處から效果のあがつてくるやうにすべきものである。

然るに、日本の支那統治は、何事も、日本の優越性を先に認めて、其下にこれを統制しようとする。それでは、民事的文化が支那側から興らないで、日本が命令して天下り式にさうすることである。故に日本の心あるものは、皆臨時維新兩政府の出來た際、北支は王克敏を中心に自治に出づべく、中支亦南京を中心に然るべくいつたものであつた。

北支、中支にかけて、支那の軍隊は二百萬餘も散在してゐるといふのであるが、これが、やがて其處に自治上の安住樂土が出來れば悅んで生產業が開發するから、二百萬軍隊も安民に消化されやうが、今の如くしては、匪賊草賊と化して、いつまでも、北、中、南支の禍ひとなるのであらう。

支那は農業中心の邦、然るに、幾洪水は、支那の農業を奪ふてしまはう。宜しく各政府に治水工事を委せて、各政府の下、古聖禹の如き大政治家が出て來て、治水に努力すべきである。

國士は、何地についても、安住樂土が大功で、樂土には安住といふことが何より必

要である。故に、出先官憲は昔の戰爭史上にいはれてあるが如く、先づ

敵に糧に依

るを第一とし、第二は

兵に敵に依

るでなくてはならない、食糧は、敵地で造り治安亦敵を利用してこれに倚るべきである。日本軍隊は、一定の地に定住してあるに留めて、糧食に治安に皆敵地から獲らねばならぬのである。然るに一切我軍隊の方で供給し、軍隊の力で治めて行く、いつまで經ても、二者は獲られないであらう。

往古神武天皇は、降將道臣尊を重く任して、其まゝ治安に當らしめたのであつた、これほど宏恢の大志でなくては敵地は治めらるゝものではない。況んや、支那を斷然世界の中核としてこれに據つて俱に共に力を戮せて世界の使命を全うさせて行くべきをやで。さういふ公平な大きな考へでなくてはならないことはいふまでもないことである。殊に、日本は己に獨伊と提携して防共の樞軸に任してゐるのであるが支那は、

古來久しく日本に恩人且つ五千年からの古い歴史の中華民國であるから、日本は支那を尊重して宜しく防共の一角に加へ、且つ其青年男女には敢へて東亞の核心たるべき名譽を與へて、共に相提携して立つべきである。然るに日本は、往々征伏國として强化統制に出てて、六法全書を振舞はす、全く治政の根本を知らぬものといつて良らう、況んや支那の特異性と社會的信用は、日本で學ぶべき知るべきことが多いのであるから尚更らのことである。今日の如くして行く只日本强化の延長であつて御龜山帝のいはれた支那の悅服に忤くことである。支那を日本の盟邦として堂々世界的大國家に仕上げて、名實與に中華民國たらしむるが、日本のいはゆる聖業である。昔は支那が、恩人、今は日本が恩を反すともいはう。

27　原と兒玉の二人と今一人山本

今日の戰爭は

戰術は科學戰

でも、戰略と政治は、其中心たる世界の智能が中心である。源義經の戰爭は、悉くが天才的であつた。鵯越に、渡邊の渡海に、皆さうであつた。豐太閤亦旗一本の樹つてあるに、早くも兵の多寡及び勝敗の數を知つてゐたといはるゝ。

滅びかゝつてゐる蔣政權が、未だのこつてゐるは、英、佛、米とソ聯の支持があるからである。

希はくば、未だこれらの戰術に政治に、知能力を中心として、原敬の如き天才的政治家、兒玉源太郎の如き謀將の出現を祈らるゝ。

嘗つて、ロシヤは日本に軍神が何體あつても、さういふものは恐ろしくはないが、一人兒玉の存在は恐ろしいといつてゐた。原は亦固より英々世界に、錐の如く鋭脱し又列國を鞠の如く拋ぐる。この二人の存在は、日支事件の如き世界的事件に必然の必要事であつた。萬一、人種戰とならば尙更のことであつた。

抑々、日支親善は人生上の正義である。正義は絶對力で天の太陽と同じ、英、米、

佛、此に知るべきである。

今一人、山本權兵衞を此に加はへたいのである、英邁山本は、かつて米國に渡りて先代ルーズヴエルトに逢つて

「オイ、ルー公此地にくると日米戰爭はいづれが克つといはれてうるさいから、此處で一番貴公と乃公と角力しようさうして勝敗を決しよう」

此一言に、遉がのルー公も辟易して出て來なかつたといはれてゐる。

出本は、かく萬夫不當の人であつた、故に海軍の大計上、幾多の犧牲を貽してゐるとのことである。此人虐聞虛色なく、只山本權兵衞であつた。

28 屈原

雨後の筍か、五月さみだれの雨かの若くして、出る出來る、汗牛充棟も啻ならずといふが、今日出版界の有樣である。

然るに、この多くが市で、燒芋を販るが如く流れで大根牛房を洗ふが如く、一山何

文で、一年後には反故籠の紙屑に過ざるは、情けなきことである。

防共には、喰ふ生るは枝葉で、根本はヒロソヒの問題にて、人間の性とマルキシズムか兩立するか如何からいはなくてはならないから、マルキシズムの仍つて起りたるヘッゲルの思想を擊つが先決問題である。

所が、世間で、文章の神様といはるゝ德富蘇峰には情けなくもヒロソヒが釋らないやうである、次に法制に闇らく次に又人間學に疎い。故に彼れは、ヘッゲルもマルクスも擊てない。先年內務省の獨善官僚の手でつくつた勞働組合案にも吾關せず焉であつた。更らに信長、秀吉、家康を論じて同性同格の英雄に扱つてゐた。ヒロソヒ、法制、人間學に明かでないためであつた。

德富にして然り、他は推して知るべしである。

唯聲と人氣でさわぐ。故に十年前早稻生の一文士は、一小說で七十萬部を販り、次に一時盲目病にかゝつてゐて一キリス信者は百萬部、又野間淸治の如きも亦七十萬部を販つてゐた。聲と人氣で行けば一夜にして千萬長者とならるゝ、出版業者は全く投機

である。かく投機は、讀者層に定見なく、猿に毛の生へたぐらゐに過ざるからである。則ち德富にしても、野間にしても中學生に「しんにう」を掛けた程の實力者であるに、かく七十萬、百萬を販るは、全くこのためである。

近世、世界にマルキシズムの如き狂學問が世に出てユダヤのロシヤが出來てゐるにロンドンでも、巴里でも、紐育でも、これを看過して寧ろ「我生る道具」に利用するは、與に流れて世界を引崩すべく行くためであつても、實際は、文化が既に亡びて一人に正しい學者が無く、亦人に正しい大宗教家が無いためである。

これからいへば、彼の昔時支那の屈原は、偉い人であつた。其懷沙之賦に曰く

「離二愍之長鞠一。撫レ情効志レ兮。俛。諂以自抑。刓レ方以爲レ圜兮。常度未レ替。易二初本由一兮。君子所レ鄙。章レ畫聯レ墨兮。前度未レ改。內レ直質重兮。大人所レ盛。巧匠不斷兮。孰察二其揆正一。玄文幽處兮。矇瞳謂二之不レ章一。離婁微睇兮。瞽以爲レ無レ明。變レ白而爲レ黑兮。倒レ上以爲レ下。鳳皇在レ笯。鷄雉翔舞。同糅二玉石一兮。一槩相量。夫黨人之鄙妬兮。恙不レ知二吾所レ藏。任重載盛兮。陷滯而不レ濟。懷レ瑾握瑕兮。窮不レ得二余所レ示。邑犬群吠兮。吠二所レ

怪也。誹レ駿疑レ桀兮固庸態也。文質疎レ內。衆不レ知二吾之異采一。材撲委積兮。莫知二余之所有一重レ仁襲義兮。謹厚以爲レ豊。重華不レ可レ悟兮。孰知二余之從容一。古固有レ不レ竝兮。豈知二其故一也。湯禹久遠兮。邈不レ可レ慕也。懲レ違改レ忿兮。抑レ心而自彊。離レ溷而不レ遷兮。願二志之有一象。進レ路比レ次兮。日昧昧其將レ暮。含憂虞哀兮。限レ之以レ大故。

屈原の如く、道德の崇、學術の元たる人、之を只修身齊家の支那に置かずして、埃及アッシャリヤの地に生れしめばモーゼも、ヴイタゴラスも、追付くことでなかつたのであらう。

如何に、ヘッゲルが近世科學の神でも、彼れは人の本を極むるに、未だ粗であつた。尤とも彼れの「哲學と國家」の中には

「國家は眞理の化生」

をいつてゐるといへば屈原の造詣には、ヘッゲルも亦達してゐたのであらう、辨證法は人力を過大に見上げてゐるが、これは、後の學者が附加したともいふのである。

惟ふに、學問は「人の智惠」であるから、苟くも人の在る所乃ち學問があつた。た

ゞ小亞細亞からヨーロッパには唯物的に其れが發達したために科學ヨーロッパが出來たに反して、支那は、餘りに中原の爭覇と及び修身齊家であつたために、倫理的政治學のみが發達したのであつた。科學も人心が亦本であらう。

惟ふに、今日は性で人を治むるか、力で人を治むるかが問題でも、政治の本は性であると知り、つひに、各地は、各性に配せられあるを知るべきであらう。

29 戰爭と本能

英、佛、米は、人間の「責任」を知らざる、全くこれ未開國で、野卑禽獸である。世界は、神と佛の手前、神聖なる存在物にて、一二强國の勝手に流亡に任かすべきものではない。

若し勝手の眞似が際限なく出來得ば、バーベル塔を建てたるが如く、世界の全人が天に登るべく大工事を起しても差支あるまい。然れども人は地上の生物と限定せられてある上からはさういふことは、到底出來ないこととなつてゐる。

人類は性を有するに性を破つて「本能」化で行く。つひに猛獸の嚙み合ひで、文化も都邑も無くなつてしまはう。

若し戰爭が、本能にて闘ひ拔く、つひに人力に限りがなく、地勢に亦限りが無くならう。山の有る限り山を辿つて走り、水の有る限り水を趁うて走る。而して人力竭れば或は眠り或は匐ふて亦起つ。然れども文化亡び都邑滅するは、當然である。

蔣政權は、全世界にルートを樹てて、山に川に海に、何處迄も逃げて行く狂人の群れであるが、然るに、一旦は世界の平和維持に監督者の筈の英、米、佛が、蔣の援者となつて、此狂人の群れに、援助を送るは、一緒に世界を引崩すのである。

かくなれば世界は、全く無秩序にて物に性もなく本もなくして只力のつゞくだけといふことになる。宜しく早く、ワシントンのコングレスも、ロンドンの殿堂も巴里の凱旋門も燒き亡ぼすべきである。

昔時、日本に

士、農、工、商

の制度があつて。士卽ち「侍」は戰闘員で、他は、いつも平和の開拓者であつた、一國皆兵は一時に國を亡ぼすも、士、農、工、商には、其憂ひがない。十年前、米國のネツキストワーといふ本は、戰爭に出る兵士は六十歳以上の人であつたら子を產む盛りの人が死せずして濟むといふことをいつてゐたが、この本のいふことは、結果に於いて、日本の士、農、工、商制と同しであつた。

いづれにしても、今の英、米、佛の如く、悉くが、認識不足で、狂人の群蔣政權を援けて、ビルマに、印度に今に其本國迄を明け渡して蔣を迎へるといふのであるから、世界は一切破壞の燒瓦で一ぱいとなつてしまはう。我等は、世界の秩序の爲めに、各地各性から使命達成を祈るも、かくも、世界が亂暴となつた以上、やむなく、日本は

皇　道

世界はキリストの神、佛敎の彌陀佛等の手前、敢然、人類第一の義務として、英、米、佛を全世界國の鬼としてこれが征伐に取かゝらなくてはならないのである。

蔣と分れて、自立特行、日支間に平和を樹立すべく努力してゐる汪兆銘は、支那に

生れた學者先生であるが操志、鐵の好く中中偉いの人のやうである。

抑々還た外交は、世界の世界を第一とし。次は又世界に人の世界を知り。而して戰は勝敗の數にありとし次に敵は成るべく小に扱ひ本能的はさく可きことである。所詮英米佛、は世界の破壞者。最とも恐ろしき侵略者は、ソヴエート、ロシヤである。

昭和十四年六月十四日　印刷
昭和十四年六月十九日　發行

支那論

〔定價　金五十錢〕

著作者　矢野政二
東京市世田ヶ谷區成城町四四七番地

發行者　矢野政二
東京市神田區西神田二ノ一九番地

印刷者　池田清
東京市神田區西神田二ノ一九番地

印刷所　池田印刷所

發行所　東京市世田ヶ谷區成城町四四七番地
時事評論社
振替東京二九一五五番

390
73